

## 令和元年度岩手県スモン患者検診結果

千田 圭二 (国立病院機構岩手病院脳神経内科)  
豎山 真規 (国立病院機構岩手病院脳神経内科)  
千葉 洋子 (国立病院機構岩手病院看護部)  
佐々 知恵 (国立病院機構岩手病院看護部)  
竹越 友則 (国立病院機構岩手病院地域医療連携室)  
鈴木 直美 (国立病院機構岩手病院地域医療連携室)  
中嶋 健太 (国立病院機構岩手病院リハビリテーション科)  
三橋 楓子 (国立病院機構岩手病院リハビリテーション科)  
田中未奈子 (岩手県県央保健所)

### 研究要旨

岩手県内のスモン患者 14 名中 12 名 (男性 2 人、女性 10 人) の検診を行い、検診率は 86 %であった。検診対象スモン患者は昨年 15 人から死亡により 1 名減少した。4 名は盛岡の検診会場で、8 名は自宅あるいは入所中の施設を訪問して行った。患者の年齢は 69 歳から 88 歳 (平均 80 歳)、罹病期間は 49 年から 59 年 (平均 53.8 年)、介護保険の認定は未取得が 3 名、要支援 1 が 1 名、要支援 2 が 3 名、要介護 1 が 1 名、要介護 2 が 1 名、要介護 3 が 1 名、要介護 4 が 1 名、要介護 5 が 1 名であった。生活場所は自宅が 9 名、施設が 3 名であった。自宅で生活をしている 9 名中、6 名は独居であった。Barthel Index は 95 点以上が 5 名、75 点から 85 点が 5 名、45 点以下が 2 名であった。歩行は独歩あるいは一本杖で可能が 5 名、要介助あるいはつかまり歩きが 4 名、車いすおよび不能が 2 名であった。異常知覚は中等度 7 名、高度 4 名、評価不能 1 名であった。併発症は全員で認められ、白内障 10 名、腰痛などの脊椎疾患が 7 名、膝関節症などの関節疾患 7 名が高頻度であった。診察時の障害度は軽度が 3 名、中等度が 4 名、重度が 4 名、極重度が 1 名であった。障害要因は SMON + 併発症が 8 名、併発症が 3 名であった。高齢化に伴って、運動機能を中心とした身体機能の低下が増し、介護の必要性が増大していると考えられた。

### A. 研究目的

岩手県在住のスモン病患者の現在の身体的、精神的、社会的状況を明らかにする。

研究に際して、プライバシーの保護に留意し、個人名、住所などの情報は含めなかった。スモン現状調査個人票を研究利用することに関して、同意を得た。

### B. 研究方法

岩手県内に在住するスモン患者の検診を行い、「スモン現状調査個人票」「ADL および介護に関する現状調査」の結果を集計し分析した。統計学的分析は Prism 7 を用い、 $p < 0.05$  を有意とした。

### C. 研究結果

#### 1. 検診方法

岩手県内のスモン患者 14 名中 12 名 (男性 2 人、女性 10 人) の検診を行い、検診率は 86 %であった。検診を行わなかった 2 名の内、1 名は入院中であり、1

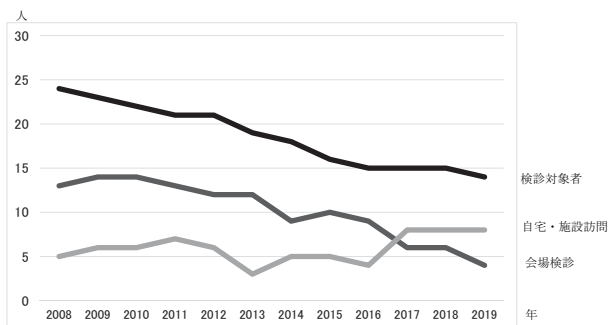


図1 検診患者数の推移

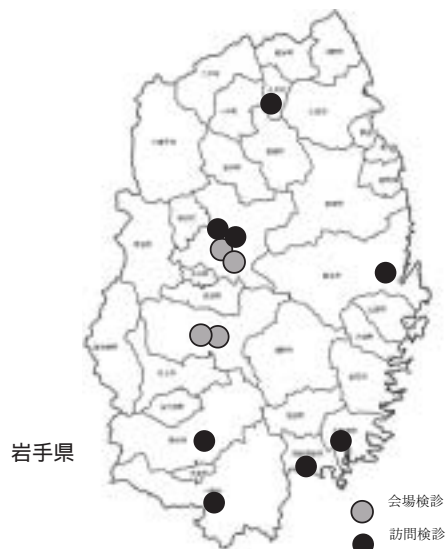


図2 患者の居住地と検診場所

名は検診を希望しなかった。検診対象スモン患者は昨年の15人から死亡により1名減少した。検診は医師、看護師、理学療法士、医療社会福祉士、保健士によるチームで行い、4名は盛岡の検診会場で、8名は自宅あるいは入所中の施設を訪問して行った。岩手県内のスモン患者は平成21年(2009年)から令和元年(2019年)までの11年間に24人から14人に減少した。減少した10人の内1人は転出であり、9人は死亡であった。検診場所は平成20年度では会場13人、訪問5人と会場での検診を受ける患者が多かったが、年々会場で受ける患者が減少し、平成29年度には会場6人、訪問8人と逆転した(図1)。本年度の訪問検診は2日間でおこない、県南は一関から県北は九戸までの地域を訪問した(図2)。訪問検診は事前に希望日をアンケートで聞いたうえで、予定を合わせて訪問する方法をとり、全例で1回の訪問で行うことができた。しかしながら、1名は訪問日を失念して外出しよう

しているところに、丁度検診チームが到着し、行き違いになるところであった。

## 2. 検診を受けた患者の背景と介護の状況

患者の年齢は69歳から88歳(平均80歳)であった。発症年齢は11歳から35歳、罹病期間は49年から59年(平均53.8年)であった。BMIは16.8から24.9(平均21.4)であった。介護保険の認定は未取得が3名、要支援1が1名、要支援2が3名、要介護1が1名、要介護2が1名、要介護3が1名、要介護4が1名、要介護5が1名であった。生活場所は自宅が9名、施設が3名であった。自宅で生活をしている9名中、6名は独居であった。独居の背景は未婚3名、配偶者と死別1名、離婚・別居が2名であった。実際の介護の状況は、介護は不要が4名、介護を要するが介護者がいないが2名、必要な時に介護を受けているが3名、毎日介護を受けているが2名であった。介護を要する8名において介護が必要になった時期は、発症時からが1名、10年前からが1名、5年前からが3名、2-3年前からが2名、1年前からが1名であった。発症時から介護が必要であった1名をのぞいて、介護を要する7名の介護が必要になった年齢は62歳から92歳であり、平均78.3歳であった。介護不要と答えた4名をのぞく8名において、介護を主に担っているのは(複数回答あり)、配偶者1名、息子1名、娘2名、ヘルパー3名、施設職員3名であった。現在の介護やこれから先に必要となる介護に対する不安について、不安に思うことがある8名、わからない2名、不安に思うことはない2名であった。

## 3. 身体機能

視力は新聞の細かい字もなんとか読める6名、新聞の大見出しは読める6名であった。眼の併発症として老眼11名、白内障10名、加齢黄斑変性症1名であった。

Barthel Indexは95点以上が5名、75点から85点が5名、45点以下が2名であった。歩行は独歩あるいは一本杖で可能が5名、要介助あるいはつかまり歩きが4名、車いすおよび不能が2名であった。外出は遠くまで可能が3名、近所までが3名、車椅子を使用

するが1名、介助を要するが5名であった。起立位は継足起立可能が1名、閉脚起立可能が2名、開脚起立可能が6名、支持で起立可能が2名、未検が1名であった。下肢筋力低下はなしが2名、軽度が3名、中等度が5名、高度が2名であった。

下肢の振動覚障害は軽度が5名、中等度が2名、高度が4名、評価不能（認知症のため）1名であった。足関節での音叉の振動感知時間は7秒以上が3名、4-6秒が3名、2秒以下5名（内3名は0秒）、評価不能1名であった。異常知覚は中等度7名、高度4名、評価不能1名であった。触覚の障害はなしが2名、軽度が2名、中等度が4名、高度が2名、触覚過敏が1名、評価不能1名であった。痛覚障害はなしが1名、軽度が2名、中等度が4名、高度が2名、評価不能1名であった。

胃腸障害はなし2名、あるが気にならないが2名、軽度が3名、症状で悩んでいるが2名であった。便通は常に下痢が1名、時々下痢が2名、常に便秘が2名、時々便秘が2名、便秘と下痢が交互にみられるが2名であった。

併発症は全員で認められ、白内障10名、腰痛などの脊椎疾患7名、膝関節症などの関節疾患7名が高頻度であった。そのほか、狭心症2名、糖尿病2名、高血圧症4名、高脂血症1名、不整脈3名、脳血管障害1名、悪性腫瘍3名（前立腺がん2名、膀胱がん1名）、胆石症2名、逆流性食道炎2名、潰瘍性大腸炎2名、C型肝炎1名、難聴1名であった。また過去1年の転倒の既往があるのは9名で、骨折2名（大腿骨、肋骨）で認められた。

診察時の障害度は軽度が3名、中等度が4名、重度が4名、極重度が1名であった。障害要因はSMON+併発症が8名、併発症が3名であった。

#### 4. 精神症候

精神症候は全員で認められ、不安焦燥6名、抑うつ6名、記憶力の低下11名であり、明らかな認知症は1名で認められた。睡眠は普通が4名、時々不眠が3名、常に不眠が5名であった。

#### 5. 生活満足度と関連する因子

生活の満足度はどちらかといえば満足が3名、どちらともいえないが3名、どちらかといえば不満足が3名、まったく不満足が2名、1名で回答がえられなかった。生活の満足度は、Barthel indexが高い患者、歩行状態がよい患者、外出の機会の多い患者で高く、実際にうけている介護量が多い患者、診察時の障害度が高い患者で低かった（ $p<0.05$ ）。

#### D. 考察

令和元年度（2019年）の検診をうけた岩手県在住のスモン患者12名の平均年齢は80歳であった。2002年の岩手県の検診では被検診者18名の平均年齢は70.9歳であった<sup>1)</sup>。2002年検診では、独歩あるいは杖歩行が90%以上であったが、本年度は50%にとどまった。合併症では白内障が61.1%から83.3%に割合が増加、脊椎疾患が61.1%から58.3%と割合に変化はなかった。不安・焦燥は55.6%から50%、うつは55.6%から50%と変化はなかった。一方介護申請をしている患者は35%から75%に、実際に介護を要している割合は16.7%から75%に増加した。スモンによる障害に加えて、加齢による身体能力の衰え、および併発症により、運動機能を中心とした障害が増し、介護の必要性が増していると考えられた。このことは生活満足度とも関連し、下肢運動機能障害が重く、介護量が多い患者では生活満足度が低かった。介護を要している患者の7割以上はこの5年で介護が必要になったと答え、今後の介護に対する不安を6割以上の患者が訴えていた。自宅で生活をしている9名中6名は独居であり、適切な介護がうけられるよう情報提供することも支援のポイントになると考えられた。

本年度は会場検診を盛岡で1日、訪問検診を2日に分けておこなった。2017年に訪問検診数が会場検診数を上回り、その傾向は年を追うごとに顕著になってきている。岩手県は北海道に次ぐ面積があり、スモン患者居住地は県南、沿岸部、県北に広く分布している。新幹線沿線以外の交通機関は高齢者に便利とは言えず、検診チームが訪問するのが効率的であり、検診率を維持するためには必要である<sup>2)</sup>。また訪問検診では居住している地域、家庭の状況、その中での患者の障害度

を理解することが可能である。検診に際しては事前にアンケートで希望日をきき、決定した訪問日を電話で確認している。今回訪問日を失念した患者が外出しようとしているところに検診チームが到着し、行き違いにならずに済んだ事例があり、当日朝にも確認の電話をするなど、より綿密な事前連絡が必要と考えられた。

#### E. 結論

高齢化に伴って、運動機能が低下し、介護の必要性が増していること、そのことが生活満足度に影響していること、独居者が多いことが明らかになった。今後も検診を通して、現状の把握と適切な情報提供をしていくことが必要と考えられた。訪問検診を希望する患者は増加していくと考えられ、円滑な訪問検診のための連絡体制を工夫していく必要があると考えられた。

#### G. 研究発表

なし

#### H. 知的財産権の出願

なし

#### I. 文献

- 1) 千田圭二 阿部憲男 大井清文：スモン検診からみた岩手県におけるスモン患者の医療・福祉の現状と問題点．医療 2005；59 (1)：3-7
- 2) 千田圭二 大井清文 阿部憲男：岩手県における現行のスモン検診システムの有効性．岩手公衛誌．2013；24 (2)：1-5